

目的 糖代謝は神経系・ホルモン系によって調節制御されるということは、この数年間にわたって多くの研究によって証明されてきた。支部会において、血糖値、インスリン、ノルエピネフリンなどの関連性について報告したが、更に引き続いて研究を進めてきた。すなわち、耐糖性の低下している人および肥満傾向にある人について、正常者との間におけるそれらの差異について報告する。

方法 正常者、耐糖性の低下している人、および肥満傾向にみられる人(♂)について血中糖濃度、血清インスリン・血清ノルエピネフリン濃度をそれぞれ経時的に測定し、これらの関連性について調べた。

結果 1. 耐糖性の低下している人について、グルコース経口投与後血中濃度は、インスリンのピークは正常者に比して時間的に遅れることが認められた。勿論、血中グルコースのピークおよび濃度の上昇も遅れることが認められた。2. 肥満傾向の人については血中インスリン濃度のピークが正常者に比して遅れ、また若干高い傾向が認められた。3. 正常者においては、グルコースの経口投与によってノルエピネフリン濃度のピークが認められた。4. 正常者のグルコースの静注においても経口投与と同じ傾向が認められた。

これらのことから、グルコース(投与)は血中ノルエピネフリンおよびインスリン分泌の契機となる働きが認められ、栄養学の立場から食物摂取の意義を考えるべきだと思っ